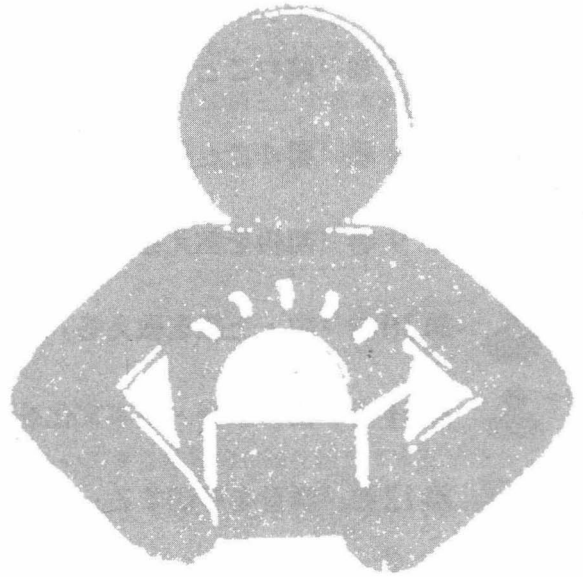


# 教材開発



# 教材開発

国際交流基金 著



**【執筆者】**

島田徳子(しまだ のりこ) 国際交流基金日本語国際センター専任講師  
柴原智代(しばはら ともよ) 国際交流基金ニューデリー日本文化センター  
日本語教育アドバイザー

**◆教授法教材プロジェクトチーム**

国際交流基金日本語国際センター専任講師  
久保田美子(チームリーダー)  
阿部洋子/木田真理/中村雅子/長坂水晶/三原龍志/築島史恵  
元国際交流基金日本語国際センター専任講師  
木谷直之(国際交流基金ジャカルタ日本文化センター専任講師主任)  
小玉安恵(カリフォルニア大学バークレー校専任講師)

イラスト 岡崎久美

**国際交流基金 日本語教授法シリーズ**  
**第14巻 「教材開発」**

---

発行 2008年5月20日 初版1刷  
定価 800円+税  
著者 国際交流基金  
発行者 松本 功  
装丁 吉岡 透 (ae)  
印刷・製本 三美印刷株式会社  
発行所 株式会社ひつじ書房  
〒112-0011 東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F  
Tel: 03-5319-4916 Fax: 03-5319-4917  
郵便振替 00120-8-142852  
toiawase@hituzi.co.jp <http://www.hituzi.co.jp>

---

©2008 The Japan Foundation  
ISBN978-4-89476-314-2

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などがございましたら、  
小社かお買い上げ書店にておとりかえいたします。  
ご意見・ご感想など、小社までお寄せくだされば幸いです。

# 国際交流基金 日本語教授法シリーズ

【全14巻】



第1巻 「日本語教師の役割／コースデザイン」



第2巻 「音声を教える」 [CD-ROM付]



第3巻 「文字・語彙を教える」



第4巻 「文法を教える」



第5巻 「聞くことを教える」 [CD付]



第6巻 「話すことを教える」



第7巻 「読むことを教える」



第8巻 「書くことを教える」



第9巻 「初級を教える」



第10巻 「中・上級を教える」



第11巻 「日本事情・日本文化を教える」



第12巻 「学習を評価する」



第13巻 「教え方を改善する」



第14巻 「教材開発」

## ■はじめに

国際交流基金日本語国際センター（以下「センター」）では1989年の開設以来、海外の日本語教師のためにさまざまな研修を行ってきました。1992年には、その研修用教材として『外国人教師のための日本語教授法』を作成し、主に「海外日本語教師長期研修」の教授法の授業で使用してきました。しかし、時代の流れとともに、各国の日本語教育の状況が変化し、一方、日本語教授法に関する研究も発展したため、センターの研修の形や内容もさまざまに変化してきました。

そこで、現在センターの研修で行われている教授法授業の内容を新たにまとめ直し、今後の研修に役立て、また広く国内外の日本語教育関係のみなさまにも利用していただけるように、この教授法シリーズを出版することにしました。この教材の主な対象は、海外で日本語教育を行っている日本語を母語としない日本語教師ですが、広くそのほかの日本語教育関係者や、改めて日本語教授法を独りで学習する方々にも役立てていただけるものと考えます。また、現在教師をしている方々を対象としています。日本語教育経験の浅い先生からベテランの先生まで、できるだけ多くのみなさまに利用していただけるよう工夫しました。なお、漢字表記に関しては、原則として日本語能力試験2級レベル以上のものにルビをつけました。内容によって省いたり、3、4級の漢字にルビをつけているものもあります。

## ■この教授法シリーズの目的

このシリーズでは、日本語を教えるための必要な基礎的知識を紹介するだけでなく、実際の教室で、その知識がどう生かせるのかを考えてもらうことを目的としています。

国際交流基金日本語国際センターでは、教師の基本的な姿勢として、特に次の能力を育てることを目的として研修を行ってきました。その方針はこのシリーズの中でも基本的な考え方となっています。

### 1) 自分で考える力を養う

理論や知識を受身的に身に付けるのではなく、自分で考え、理解して吸収する力を身に付けることを目的とします。

## 2) 客観性、柔軟性を養う

自分のこれまでの方法、考え方にとらわれず、ほかの教師の意見や方法を知り、客観的に理解し、時には柔軟に受け入れることのできる教師を育てることをめざします。

## 3) 現実を見つめる視点进行を養う

つねに現状や与えられた環境、自分の特性や能力を客観的に正確に把握し、自分の現場に合った適切な方法を見つける姿勢を育てることをめざします。

## 4) 将来的にも自ら成長できる姿勢を養う

研修終了後もつねに自分自身で課題を見つけ、成長しつづける自己研修型の教師を育てることをめざします。

## ■この教授法シリーズの構成

このシリーズは、テーマごとに独立した巻になっています。どの巻からでも学習を始めることができます。各巻のテーマと概要は以下の通りです。

- |      |                  |   |                                     |
|------|------------------|---|-------------------------------------|
| 第1巻  | 日本語教師の役割／コースデザイン | } | 日本語を教えるうえでの全体的な問題をとりあげます。           |
| 第2巻  | 音声を教える           |   |                                     |
| 第3巻  | 文字・語彙を教える        | } | 各項目に関する基礎的な知識の整理をし、具体的な教え方について考えます。 |
| 第4巻  | 文法を教える           |   |                                     |
| 第5巻  | 聞くことを教える         |   |                                     |
| 第6巻  | 話すことを教える         |   |                                     |
| 第7巻  | 読むことを教える         |   |                                     |
| 第8巻  | 書くことを教える         |   |                                     |
| 第9巻  | 初級を教える           | } | 各レベルの教え方について、総合的に考えます。              |
| 第10巻 | 中・上級を教える         |   |                                     |
| 第11巻 | 日本事情・日本文化を教える    |   |                                     |
| 第12巻 | 学習を評価する          |   |                                     |
| 第13巻 | 教え方を改善する         |   |                                     |
| 第14巻 | 教材開発             |   |                                     |




## ■この巻の目的

教材作成と言ったとき、教師個人が「授業で学習者に配布するプリント」や、「教室で補助的に使う教材や教具」などを作ることを思い浮かべる人も多いでしょう。しかし、この巻は、「あるコースや科目の教科書として使用する教材」や、「国の定めたシラバスやスタンダードに基づいて作成する教材」など、「もう少しまとまりがあり、特定の教育現場で、中長期的に使用される教材」の作成を支援します。出版を前提とした教材作成についてはほとんど触れません。将来的に出版したいと考えている人は、まず、特定の教育現場で使用される教材として作る方法を本書で学んでから、出版社に相談するといいでしょう。

教材を作成するには、授業設計能力だけでなく、総合的な知識や幅広い能力を必要とします。ですから、この巻は、ほかの巻と比べて、内容的にむずかしい部分もあるでしょう。すべての課題に答えることよりも、この巻全体を通して、教材作成のプロセスを体験することが大切だと考えています。教材作成のプロセスを実際に体験することで、次の5つのことができるようになるでしょう。この5つが、本書の目的です。

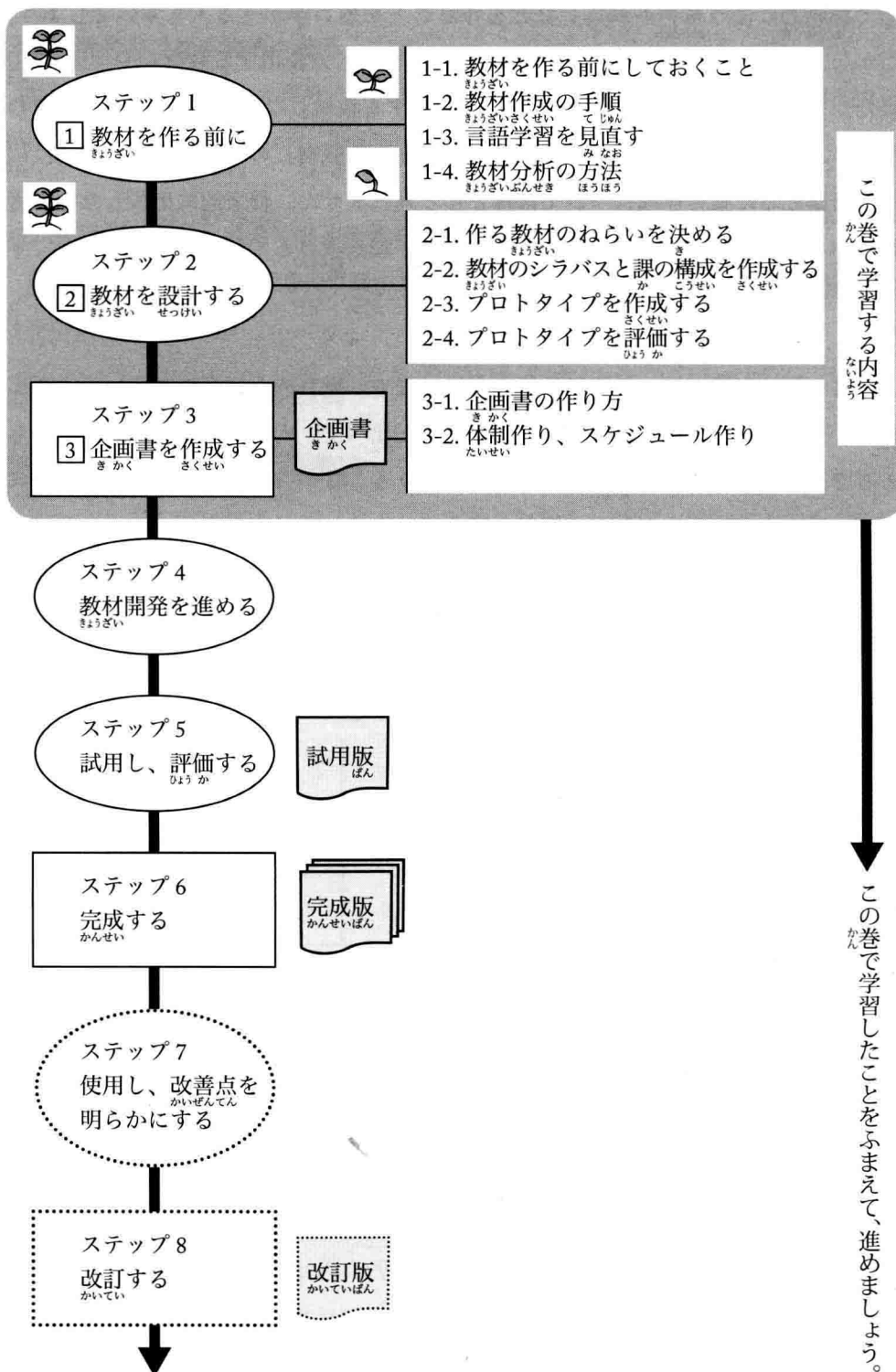
- ①自分のコースについて、現状の課題を整理する。
- ②既存教材を客観的に分析できる。
- ③自分の言語学習に対する考えや、教授実践をとらえなおす。
- ④教師同士が、お互いの言語学習に対する考えや教授実践を共有する。
- ⑤教材作成の手順や方法を理解する。

この巻は、教材を作成したい方だけでなく、次のような目的を持った方にも参考にしていただきたいと考えています。それぞれの目的に応じて、「この巻の構成」の次の絵のところを重点的に読んでください。

日本語教師をしている、または、これから教師になりたいと考えていて、教材作成について知識を増やしたい人は、の絵の部分を読みましょう。自分が教えているコースの現状分析をして、コースを改善したい人は、の絵の部分を読みましょう。自分が使用している教材を分析して、何が足りないのかを明らかにして、授業を改善したい人は、の絵の部分を読みましょう。

## ■この巻の構成

### 1. 構成：教材作成のステップとこの巻で学習する内容



## 2. 課題（【課題】）

この巻の中の各課題は、次のような内容にわかれています。



考えましょう

### 活動や実践の意味を考える

今までやってきたこと、さらに「やってみましょう」で挑戦したことの意味を、理論的な背景と照らし合わせながら考えます。



やってみましょう

### 新しい方法を体験する

新しい学習・教授方法を体験したり、今までもやってきた学習・教授方法を、その意味を考えながら、もう一度やってみたりします。



自分のプロジェクトでやってみましょう

### 学んだことを自分の教材作成プロジェクトに適用する

自分で作りたい教材がある場合は、学んだ方法を自分の教材作成プロジェクトに適用してみて、理解を深めます。

# 目次

<b>1</b>	教材を作る前に	2
	1-1. 教材を作る前にしておくこと	2
	1-2. 教材作成の手順	9
	1-3. 言語学習を見直す	19
	1-4. 教材分析の方法	29
<b>2</b>	教材を設計する	38
	2-1. 作る教材のねらいを決める	38
	2-2. 教材のシラバスと課の構成を作成する	42
	2-3. プロトタイプを作成する	51
	2-4. プロトタイプを評価する	54
<b>3</b>	企画書を作成する	64
	3-1. 企画書の作り方	64
	3-2. 体制作り、スケジュール作り	71
	最後に	78
	よくある質問 (FAQ) — 海外で教材を印刷・出版する	80
	『教材開発』の重要語彙	87
	解答・解説編	88
	【参考文献】	103
	巻末資料	105



下記の資料は、ひつじ書房のサイト (URL : [http://www.hituzi.co.jp/nihongo\\_kyojuho/](http://www.hituzi.co.jp/nihongo_kyojuho/)) で提供しています (関連するページ)。

- ・練習を分析するための表 (p.35)
- ・企画書の書式 (pp.66-67)
- ・マスタースケジュールの書式 (p.74)
- ・著作物使用許諾申請書 (見本) と記入例 (p.82)

# 目次

<b>1</b>	教材を作る前に	2
	1-1. 教材を作る前にしておくこと	2
	1-2. 教材作成の手順	9
	1-3. 言語学習を見直す	19
	1-4. 教材分析の方法	29
<b>2</b>	教材を設計する	38
	2-1. 作る教材のねらいを決める	38
	2-2. 教材のシラバスと課の構成を作成する	42
	2-3. プロトタイプを作成する	51
	2-4. プロトタイプを評価する	54
<b>3</b>	企画書を作成する	64
	3-1. 企画書の作り方	64
	3-2. 体制作り、スケジュール作り	71
	最後に	78
	よくある質問 (FAQ) — 海外で教材を印刷・出版する	80
	『教材開発』の重要語彙	87
	解答・解説編	88
	【参考文献】	103
	巻末資料	105



下記の資料は、ひつじ書房のサイト (URL : [http://www.hituzi.co.jp/nihongo\\_kyojuho/](http://www.hituzi.co.jp/nihongo_kyojuho/)) で提供しています (関連するページ)。

- ・練習を分析するための表 (p.35)
- ・企画書の書式 (pp.66-67)
- ・マスタースケジュールの書式 (p.74)
- ・著作物使用許諾申請書 (見本) と記入例 (p.82)

# 1

## 教材を作る前に きょうざい

### 1-1. 教材を作る前にしておくこと きょうざい

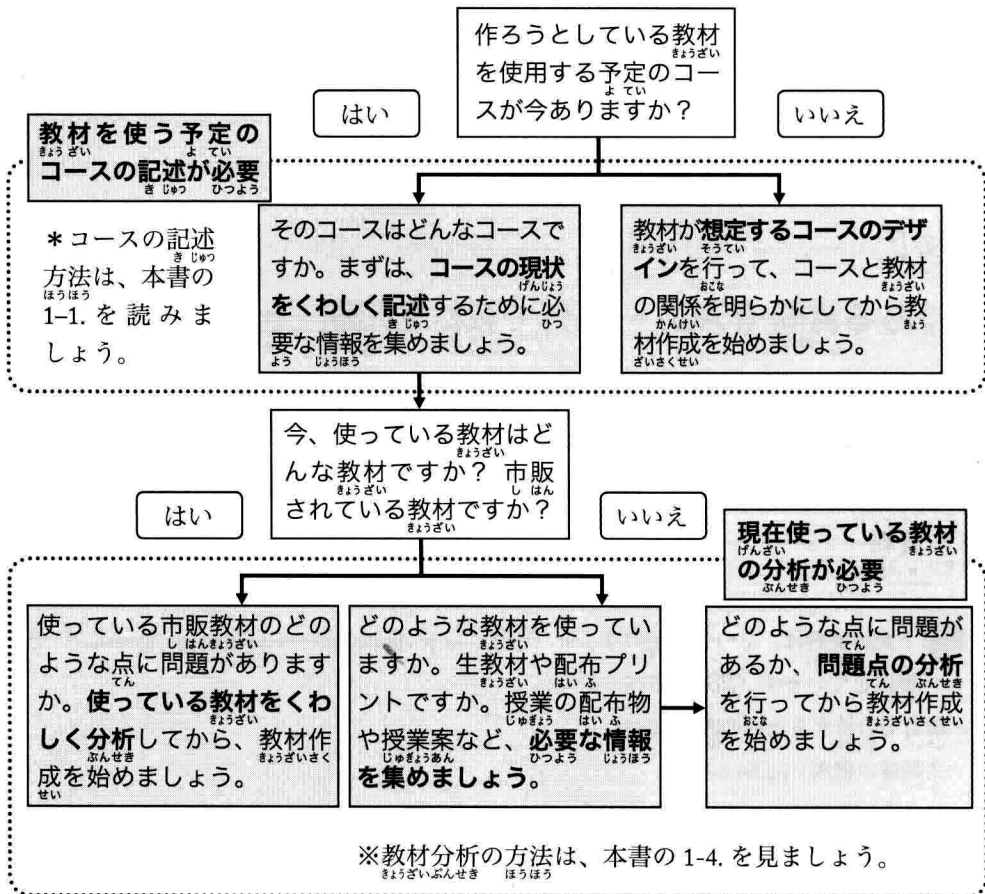
教材を作成する前に、「何から始める必要があるか」、また、その教材を作るために「どのような情報を集めて整理しておく必要があるか」確認しておきましょう。



考えましょう

#### 【課題1】 かだい

あなたが教材を作る前に何をしなければならないか、次のフローチャートを使って確認しておきましょう。  
かくにん



本書では、「A国にある、さくら日本語学校で、これまで実施されてきた日本語コースを見直し、そのコースのための教材を作る」という事例に基づいて、共通の課題に取り組みながら、教材作成の方法を実践的に学んでいきます( やってましようの課題)。

そして、共通の課題で学んだ知識や手法を、自分自身の作りたい教材作成に活かします( 自分のプロジェクトでやってみましようの課題)。

これからあなたは、さくら日本語学校の教師の1人として、さくら日本語学校のほかの教師と一緒に協力して教材作成を行います。まず、これからあなたがメンバーの一員として教材作成を行う、さくら日本語学校の状況について読んでみましょう。

### 事例：さくら日本語学校のコース教材を作る

あなたがこれから仕事を始めるさくら日本語学校は、アジアのA国にあります。この学校には、大学生や一般成人を対象とした日本語のコースがあります。各コースでは日本で市販された教材を使っています。

コースにはいろいろな問題があります。コースの学習時間と教材が想定する学習時間が異なるため教材を最後まで使用できないままコースが終了してしまうこともあります。また、その教材で学習したら日本語を使っていけるようになるのかが示されていないので、教師も学習者も日本語ができるようになったという実感が持てません。

学習者からは「コースを終了するのに会話ができない」、「行ったことがない東京の話ばかりで教材がおもしろくない」という不満も聞かれ、学習者数も減少しています。

そこで、さくら日本語学校では、これらの問題を解決するために、今のコースを見直し、コース教材を作成することにしました。あなたには、さくら日本語学校のほかの教師と協力して教材を作ることが期待されています。

## さくら日本語学校の先生



学校長リン氏



ラン先生



チュン先生



トウイ先生



福山先生  
ふくやま



## やってみましょう

### 【課題2】

あなたが、さくら日本語学校の状況をもっとくわしく知るためには、どのような情報が必要ですか。次の情報を知るために、情報源として使えそうな資料や情報を書き出してみましょう。

### ■ さくら日本語学校が提供しているコースの概要

### ■ さくら日本語学校の教師／学習者に関する情報

### ■ さくら日本語学校の設備

### ■ さくら日本語学校の教育内容

あなたは、コースの現状を知るために必要な情報を書き出して、5年間さくら日本語学校で日本語を教えている同僚のラン先生に相談してみました。ラン先生は、コースの現状を分析するために、①生徒募集のちらし、学校案内などコース概要の資料、②使用している教材、③教案、④授業で使用した配布資料、⑤授業日誌、⑥小テストと期末試験の問題、⑦小テストと期末試験の成績、⑧出席簿、を集めていました。そして、機関の責任者や教師にはインタビューを行い、その結果をまとめていました。学習者に対しては、「学習の目的」「学習方法や学習スタイル」「コー

スでどのような日本語を勉強したいか」「どんな**場面**で日本語が不十分だと**感じる**か」について、**アンケート調査**をしていました。そして、それらの**情報**を、**次の**ようにまとめていました。



やってみましょう

### 【課題3】

ラン先生のまとめた資料をよく読んで、さくら日本語学校の抱える問題や課題と関係がありそうな部分に、下線を引いておきましょう。

#### ■さくら日本語学校が提供しているコースの概要

さくら日本語学校は、日本との相互理解を促進しようと設立され、20年になる。現在は、初級コース（25人×2クラス）と中級コース（10人×1クラス）がある。

#### ■さくら日本語学校で学んでいる人、教えている人に関する情報

##### ●学校長へのインタビュー

さくら日本語学校の学校長リン氏へのインタビューでは、以下のことが指摘されている。

- ・最近、周囲に日本語学校が増えてきており、差別化を図るため、ほかの日本語学校では開講が少ない中級コースに重点を置きたい。
- ・学習者には研究者もいるし、ビジネス関係者もいる。中級コース以上は、学習者のニーズにそくした目的別コース（研究者向け、大学生向けビジネス日本語、IT技術者向け、一般学習者向け異文化理解促進など）を開講したい。
- ・学習者の会話能力を伸ばし、日本の大学との交流（大学生、研究者、経済学部関係者）も活発にしたい。



- ・ もっと日本人と話したい。
- ・ 教材に知らない地名や場所が出てくると、つまらなくなる。
- ・ 中級コースと初級コースでは教材が違うので、中級コースになるとむずかしい。
- ・ 学習目的は、「日本人の学生や研究者と交流したい」、「日本語で情報収集したい」、「ビジネスに使用したい（商談、出張）」という学習者が多い。
- ・ 日本人と話してもどんな話題がいいのかわからない。わからないことばかり多くて、話が続けられない。
- ・ 日本語で話していても、話し方や価値観など文化的なずれを感じる。
- ・ たくさん暗記してもなかなか口から出てこない。
- ・ 授業で勉強していることが教室外で役に立つのか疑問を感じる。

### ■さくら日本語学校の設備

教室は 30 人入れる教室が 2 つある。机は移動することができない。教室には、黒板と、図表や地図がはってある。CD ラジカセは 1 台あり、教員室から持っていく。日本語の本や雑誌のコーナーがあり、学習者はその場で読むことはできるが、借りることはできない。

### ■さくら日本語学校の教育内容

#### ●シラバス

- ・ 初級コースのシラバスはない。日本で出版された初級教科書を 18 カ月（約 300 時間）で終了する。終了時点で、語彙 2000 語と基礎的な文法を学び、簡単なコミュニケーションができることを目指している。
- ・ 中級コースのシラバスもない。日本で出版された中級教科書を 9 カ月（約 150 時間）で終了する。終了時点で、1480 語の語彙と 139 項目の文型を学び、身近な場面・機能でコミュニケーションできることを目指している。

#### ●カリキュラム

- ・ 1 年を 3 学期にわけていて 1 学期は 3 カ月（12 週）である。1 学期は 2